

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2007
Jtitle	Newsletter Vol.2, (2007. 12) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000002-0006">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000002-0006</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
9月7日	言語と認知班	意味論研究会①
10月17日	脳と進化班	Perception of Biological Motion
10月20, 24, 31日	研究発信支援プログラム	英文論文執筆推進のための連続講習会
10月23-25日	国際教育研究プログラム	Keio-Vienna Joint Seminar: Experimental Studies of Social Cognition in Birds.
10月26日	言語と認知班	意味論研究会②
11月5日	哲学・文化人類学班	Prof. C.C.W.Taylor 講演会 “Aristotle on Eudaimonia”
11月15日	論理・情報班	日韓哲学交流の集い
11月30日	言語と認知班	意味論研究会③
12月7日	論理・情報班	Plato the Socratic
12月15日	言語と認知班	ことばの力を育む—小学校英語を超えて—
12月17日	哲学・文化人類学班	Reason and Voluntariness
12月17日	脳と進化班	第109回バイオサイコシンポジウム
12月19日	研究発信支援プログラム	アメリカ合衆国における外国人 PD、研究者の現状
12月22日	脳と進化班	衝動性の科学—感情・行動・合理性—

### 意味論研究会①、②(9月7日、10月26日開催)

Over the past two months we have had two meetings of the Semantics Research Group.

On October 26, David Yoshikazu Oshima of Ibaraki University gave a presentation titled *Topichood, Givenness, and the Particle wa in Japanese: Reconsideration and Reconciliation* at Hirosaki Gakuin University. In this talk Professor Oshima presented a semantic analysis of one major function of the particle *wa* in Japanese, an analysis that integrates and reconciles two major approaches: the topichood-based approach and the givenness-based approach. He showed that neither approach on its own can constitute a complete theory of thematic *wa*, but at the same time argued that a combination of the two approaches can yield a potentially adequate theory. He proposed in particular that *wa* marks a topic only when it is associated with certain grammatical functions, such as (direct or indirect) object, while it merely indicates givenness (groundness) when

it is associated others, including subject. In other words, the function of a given occurrence of (thematic) *wa* is determined only in conjunction with the grammatical context surrounding it.

On September 7, Hiroki Koga of Saga University gave a presentation at Keio University titled *A Grammar of Tense and Verb Morphemes with the Standard Japanese and the Saga Dialects as Its Initial Scope*. In this talk Professor Koga presented a grammatical analysis of tense and verbal morphology in Saga dialects. He argued for a reanalysis of Saga morphology based on two central ideas: (i) that the so-called tense morpheme /u/ does not indicate the time of an event but is rather timeless; and (ii) that a verb-final /r/ selects a base verb form as its complement. He showed how these two ideas could be used to account for syntactic, phonological, phonetic and semantic peculiarities of the Saga dialects. (Christopher Tancredi)

### 研究発信支援プログラム 英文論文執筆推進のための連続講習会(10月20、24、31日開催)

表題の目的で、2007年10月20日、24日、31日に講習会を実施した。1回目はプログラム責任者の小嶋が、2、3回目は国立精神神経センターの中村克樹氏が講師である。各回90分で、参加者は慶応義塾および他大学の大学院生を中心に約30名であった。

小嶋は国内外への出張や英文校閲、雑誌掲載への補助に関する事務手続きを説明した。続いて、雑誌の impact factor (IF) と各論文の引用度数の検索法を会場で供覧した。IF は雑誌のレベルの目安になり、論文を投稿するときの参考になることを紹介した。引用度数の検索は、このような点を考えたことがなかった若手研究者の意識改革の意味で実施した。

中村氏は論文、特に多くの人が目を通す英文論文を持つことの重要性を語った。科学は一人で行うものでなく、多くの研究者

が知識を共有することで発展する。もし論文を執筆しないなら、その発展に寄与できない。和文論文と比較して英文論文は多くの研究者の目に留まりやすい。それゆえ、極力英文で執筆すべきだ、という主旨であった。また、IF だけでなく、掲載論文がどれほど長く引用されるかという項目にも注意すべきなど、IF のもつ問題点も指摘した。中村氏はさらに、研究成果の発表を競うあまり、不正を行う例があることを紹介し、そのようにならないよう注意を喚起した。

最後に小嶋が補足し、英文を書くことは能力でなく習慣の問題であること、英文論文を持つことが研究者としてやっていくことの基本的な条件であることを話した。以下は霊長類研究所にいた某氏の言である。正しい英語が分かりませんが、Publish, or perish! (小嶋祥三)

## “Global COE symposium on Perception of Biological Motion”

日時：10月17日(水曜日) 13:30 - 18:00 場所：慶應義塾大学三田キャンパス 東館 G-SEC6 階

企画者：渡辺茂、山本絵里子(慶應義塾大学)

平成19年10月17日(水)、慶應義塾大学三田東館G-SEC6階において、“Global COE symposium on Perception of Biological Motion”が開催された。Nikolaus, F. Troje先生(クイーンズ大学)が日本学術振興会招聘研究者として慶應義塾大学を訪問するにあたり、本シンポジウムは企画された。現在、心理学の分野において、バイオリジカルモーションは、その知覚研究のみならず、社会的認知機能や社会的認知機能を担う神経機構を検討するために広く使用されている。そこで、本シンポジウムでは、バイオリジカルモーションについて、多角的側面から議論することを目的とした。塾外から、Nikolaus, F. Troje先生(クイーンズ大学、日本学術振興会招聘研究者)、平井真洋先生(自然科学研究機構生理学研究所)、そして、山口真美先生(中央大学・科学技術振興機構さきがけ)を講演者として招聘した。また、塾内か

らは菊池菜穂子(慶應義塾大学)、山本絵里子(慶應義塾大学)が講演を行った。本シンポジウムは、バイオリジカルモーション知覚について、心理学、コンピュータサイエンス、そして、脳機能研究などの様々な視点から議論する機会となり、大変意義深いものであった

(山本絵里子)



## Prof. C.C.W.Taylor 講演会 “Aristotle on Eudaimonia” (11月5日開催)

クリストファー・テイラー教授は、古代ギリシア哲学の研究において長年世界をリードされてきたオクスフォードの碩学で、原子論者、ソクラテス、プラトン、アリストテレスについて代表的な研究書を出版されている。これまで韓国で講演する機会をもっておられたが、今回はその折に日本にも足を延ばしていただき、東京での初講演となった。主題は「アリストテレスのエウダイモニア論」で、20名ほどの聴衆と活発な議論を交わされた。特に学生

からの質問を求められるなど、温厚な教育者としてのお人柄にも接することができた。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』の主

題である「エウダイモニア」—通常「幸福」happinessと訳されるが、そういった近代語訳がもつ問題性も指摘された—の理解は、それが様々な善きものの総合であるか(inclusive)、単一の善を専らに目指すものか(dominant)で、研究者間の論争が続いてきた。テイラー教授は、議論の流れを慎重に分析されながら両解釈を調停し、アリストテレス倫理学の全体像を「政治学」も射程に入れながら示された。とりわけ興味深かったのは、「フロネーシス」(賢慮)に二重の重要な役割を見る解釈で、バランスのとれた刺激的な読み筋に視野を啓かれた。

講演会では、事前にペーパーを配布できなかったため、綿密な議論に対して詳細に立ち入った質疑ができなかったことがやや残念ではあるが、古代ギリシアの専門研究者だけでなく、隣接分野の方々や学部学生からも大きな文脈で疑問を提示していただき、楽しく有意義な議論ができた。主催者として感謝申し上げたい。(納富信留)



## Keio-Vienna Joint Seminar (10月23-25日開催)

ウィーン大学は本GCOEの国際連携拠点の一つであり、L. Huber教授は事業推進担当者のひとりでもある。今回の講義は生命科学部の“The evolution of Social Cognition”というレクチャーシリーズの一つとして招聘されたものである。事前によくつかの選択肢を提示したが、“Experimental studies of social cognition in birds”がよからうということになり、鳥類の種弁別、個体弁別、個体の行動の弁別、模倣、それらの脳内機構、といったトピックスについて講義を行った。講義終了後はちょうど季節であるのでグリーンツイングでホイリゲ(新酒)を楽しんだ。以前

にキンギョにバッハの曲を聴かせる実験をして、あまりうまく行かなかった話をし、ついでに、マスにシューベルトを聴かせればうまく行ったかもしれない、という冗談を言ったら大変にうけた。

(渡辺茂)

